写真班　　梅崎春生

教材のねらい

1　選定の理由

この作品で主人公は、自分の家にいながら、自らは望まない訪問者の侵入を許さざるを得なくなり、自明なはずの自身の存在や権利は、侵害され、徐々に不確かなものに変わっていく。まず写真班が撮影に関して、住宅が公庫からの融資によって作られたことを理由に、持ち主に裁量はないと主張する。この写真班が訪問できたのも、遡れば、電気屋が訪問する側の便利を言い立て、主人公には不要なブザーを設置したからだった。自身の権利の不確定は深刻な話題ではあるが、テンポある会話によって、ユーモアも感じる描きぶりである。

自分の家や部屋を、他人のまなざしや交渉から自分を解放できる空間としている人は多いだろう。それが機能しなくなる体験を、小説ならではの不思議な世界として楽しむとともに、自分たちの生活を根幹で規定している現実の制度について考えたい。私たちは、部屋を自分だけの空間としたり、逆に、部屋やさまざまな持ち物によって自分がどういう人間かを周囲に示したりしているが、それは、世間や国家などによるルールの共有や、経済の仕組みの共有に基づいている。アイデンティティの不確実性は普遍的な問題でもある一方で、それを支える具体的な制度は、近代という時代が生み出したものであることを、作品内の世界と現在との共通点・相違点を通じて考えたい。

2　指導のねらい

作品世界では、漫画やお笑いにも通じる不条理が起こっていくので、まずはそれを楽しみたい。それらは、整合性はあるが常識とは微妙に異なる訪問者たちの論理によって成り立っている。それらのしかけを意識しながら、私たちの日常生活の前提となる制度を考えることへ導きたい。また、表現の特色も理解したい。

(1) 場面展開に即して、主人公が感じる理不尽な思いとその理由を、他の人物の言動や状況との関係で整理する。

(2) 作中人物同士の非人間的な関係をイメージさせる設定や小道具、また表現の工夫について理解する。

(3) 作品内の物事から時代背景を推測し、現在との共通点・相違点を考えさせる。

(4) 各自の日常的な行為を規定している前提について、身の回りの事例から考えさせる。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで小説や随想の表現の仕方・特色をつかみ、作品の成立した時代や背景について調べ、学習課題に沿って、時代状況が現れている部分が作品のテーマとどのようにかかわっているかを考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 作品全体の展開を大づかみに捉えさせる。	① 全体を一読し、初読後の印象を共有する。	① 平凡な日常を切り取った小品のような導入から、訪問者たちの来訪によって「彼」の静かな休日だけでなく、「彼」が意識すらしてこなかった常識があぶり出され、それらの根拠が脅かされていく。この不穏さとおかしみが同居する作品であることを最初に理解させたい。一読後の第一印象として、訪問者たちと「彼」のそれぞれに対する違和感を表明する生徒も出てくると推測されるが、なぜそうした感想が生まれるのかということそれ自体にも目を向けさせたい。
	2 登場人物が置かれた状況や人物像をつかませる。	② 「彼」の状況や人物像を捉える。	② 状況については、日曜日の日中であること、人物像については、勤め人であり、新居を購入したばかりであること、同居人の有無には言及がないが、おそらく独居していることを押さえつつ、ざっくばらんに意見を交換するなどできればよい。
		③ 物語内時間に着目し、段落分けの根拠を考えながら全体の展開を捉える。思判表	③ 本文は日曜日の午後のごく限られた時間を描いており、そうした現実的な時間は大きく動かない一方、「彼」の気付きや記憶がストーリーを駆動する力を生み出している。この点に着目して場面展開を考えさせる。
展開	1 語句の理解から、文意を確認させる。	① 〈第一段〉（初め～二一三・3）語句の理解、文意の解釈を進める。知技	① 現代日本の住居において、ブザーを見る機会は少なくなっている。ブザーとはどういう形状で、どのような音が鳴るのか、ベルやインターホンのチャイムとどう異なるのかといったことを確認させる。また、茶の間、台所、土間など、この段落に登場する言葉から、「彼」の家や昭和三十年前後の新築住宅に対する理解を促す。
	2 人物像を捉え、事件の経過を把握させる。	② 「彼」の心情の動きを把握する。思判表	② 冒頭からブザーの音を「重苦しく」（二一一・1）聞く「彼」の心理や、「腹立ちの対象」（二一一・10）、「えたいの知れぬ狼狽」（二一一・16）の理由などは特に重点的に理解させたい。
	3 実際の時代状況を踏まえ、物語内部の諸設定を理解させる。	③ 写真班の二人の人物像を捉える。思判表	③ 顎鬚とイガクリの関係や、顎鬚の発言と態度を踏まえ、二人の登場によって「彼」にどのような不安がもたらされているかを考えさせる。
	4 訪問者たちと「彼」とのそれぞれの論理の違いを理解させる。	① 〈第二段〉（二一三・4～二一五・8）写真班の立場を確認する。知技	① 「金融公庫住宅資料調査社」（二一三・5）という会社は実在しないが、「金融公庫」や「住宅金融公庫」（二一五・7）を調べさせることで、写真班の二人の背景や、横柄な態度を根拠付けるものについては説明可能になる。

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
展開	5 「彼」の不安の内実や、その前提となっている事柄を理解させる。 6 作中に込められたモチーフの象徴性を理解させる。	② 顎鬚の言う「責任」や「義務」と「権利」の内容を整理する。思判表 ③ 「彼」が置かれた状況を理解する。思判表	② 顎鬚たちがなぜ家の写真を撮るのか、家はなぜ撮られねばならないのか、「彼」はなぜ撮影を拒めないのか、といった複数の観点から、顎鬚の主張を捉えさせる。その上で、「あんたはまるまるあんただからだ。ところがこの家はそうではない」（二二五・2）という顎鬚の断定を手掛かりに、住居とそこに住む人との関係や、住むことを可能にする条件についても意見を出し合わせたい。 この段落では顎鬚たちに一方的に押されている「彼」の姿が顕著だが、その中でも「何か言おうと思う」（二二五・4）と「彼」の意思それ自体は確実に認められることと、一方で「言うことが見つからない」（二二五・5）という不如意な状態にあることを見逃さずにおきたい。
		〈第三段〉（二二五・9～二二八・8） ① 電気屋とのことを思い出す契機を確認する。知技 ② 「彼」の家の規模をつかむ。思判表 ③ ブザーをめぐる「彼」と電気屋の考え方の違いをまとめる。思判表	① 回想の導入として、同一あるいは類似した出来事を書き込むという方法は常套だろう。ここでは玄関で靴を脱ぐという行為が、写真班と電気屋とを結びつけている。 〈第一段〉以上に家の様子が鮮明に描かれるのがこの段落の特徴と言えよう。「十四五坪程度のコマギレ住宅」（二二六・4）、「ベルを取り付けるには家が小さすぎる。」（二二六・10）といった電気屋の言葉から、「彼」の家の様子を改めて確認させたい。 「彼」は来訪者の肉声によって、その性格を見通したいと言うが、電気屋は来訪者の声がけを訪問者に不要な労力を強いるものと見ている。つまり、「彼」はあくまで家の居住者としての観点から述べているのに対し、電気屋は居住者の意図や立場を無視し、来訪者の立場から、かつ、損得という観点によって主張を述べている。電気屋の商売から見れば、この方法は客の主張の論点をあえてずらし、自分の都合を叶えるための手段となっている。これらの点を整理させたい。
		〈第四段〉（二二八・9～二三〇・15） ① 「彼」が気付いた内容をつかむ。思判表 ② 写真班と電気屋の共通点を整理する。思判表	① 「（つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは――）」（二二八・9）に始まる「彼」の思惟を辿り、家と人との関係をまとめさせる。あわせて、これまでの「彼」に不安をもたらしてきたものの正体が、経済を前提とした所有のシステムにあることにも目を向けさせたい。 写真班と電気屋とがともに「彼」の意見だけでなく、存在そのものを半ば無視していること、それが「彼」の発言の核心を酌もうとは一切しない、意図的にコミュニケーションを不成立とするようなやり方によって達成されていることを理解させる。

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
展開		③ モリソバの象徴性について考える。思判表	③ 冒頭以来影を潜めていたモリソバが、〈第四段〉で主要なモチーフとして前景に出てくる。モリソバが「彼」にどのような気持ちを喚起させるかを確認すると同時に、改めて、日曜日の昼にモリソバを食べるという設定の卑近さに目配りしつつ、モリソバが何を象徴するかを考えさせる。仮に日常そのものの象徴とするならば、モリソバが「彼」の口を塞いで声を出させないようにするという結末をどう理解するか、意見を出し合わせたい。
まとめと発展	1 全体のまとめをして、主題について考えさせる。 2 読書活動、言語活動への発展をはかる。	① 作品の主題について考える。主態 ② 表現上の特色を整理する。知技 ③ 作者とその作品に即して読書指導、言語活動への発展をはかる。思判表	① 社会生活を送るなかで、当然皆が了解していると普段は意識すらしてこなかった事柄も、実は一定のルールに則って成立している。そもそも、自己を取り囲んでいる他者そのものが、実は了解不可能な存在としてせり上がってくる瞬間もあり、そうした世界に私たち一人ひとりが置かれている。ルールを共有できなければその他者は容易に自己の存在を脅かす。そうした基盤の不確かさと規範のあり方に気付かせる。 ② 主題にはシリアスな問題も込められているが、一方でこの作品には滑稽さもある。それをもたらす要素をおさえる。作中人物どうしのやり取りのズレもその一つだが、表現にも着目したい。たとえば、この作品には風景描写に心理描写を重ねるタイプのレトリックはそれほど見られないが、「彼」の心内語を丸括弧で括ることで、来訪者たちが勝手に動き回っている脇で、「彼」が内省に耽っていると読むことができる。発話の長短もメリハリが利いており、テンポがよい。こうした作中を流れる時間の速度を乱さないための工夫が、読者を引き込み、滑稽さを誘う。 ③ 梅崎春生の文学的営為と「市井事もの」を学習させつつ、読書指導においては安部公房「闖入者」やカフカ「城」などを紹介することで、他にも類似したテーマの文学作品が多くあることを示す。

作者

梅崎春生

大正四（一九一五）年～昭和四十（一九六五）年。小説家。福岡県福岡市に生まれる。父建吉郎は陸軍士官学校出身の歩兵少佐。修猷館中学校から第五高等学校に進み、のちに小説家となる霜多正次らと同級だったが、落第して木下順二と同学年になる。昭和十一（一九三六）年、東京帝国大学国文科に進学し、十四（一九三九）年八月、「早稲田文学」に小説「風宴」を発表。十五（一九四〇）年、卒業。卒業後は東京市教育局教育研究所の雇員となる。十七（一九四二）年初頭に陸軍の召集をうけたが、軽い気管支炎を肺疾患と誤診され、即日帰郷した。十九（一九四四）年には海軍に召集され、佐世保相ノ浦海兵団に入団、暗号特技兵となる。二十（一九四五）年五月、下士官教育を受けて二等兵曹となり、敗戦まで九州の基地を転々とする。戦後、この海軍体験を踏まえ「桜島」（昭二十一）を発表し、戦争文学の優れた書き手として一躍注目されるに至った。その後、市民の平凡に見える日常に風刺や寓意を込める「市井事もの」と呼ばれる作品を多数発表するようになり、「ボロ家の春秋」（昭二十九）で第三十二回直木賞を受賞した。同じ年には「砂時計」で第二回新潮賞を受けた。

やがて梅崎は目まいなど心身の不調に悩みはじめ、不安を過量の飲酒で紛らわすようになる。昭和三十四（一九五九）年には、不安神経症状（うつ状態）により入院し、持続睡眠療法を受けた。退院後には長篇「狂い凧」（昭三十八）によって芸術選奨を受けた。昭和四十（一九六五）年七月十九日、以前から患っていた肝硬変の急激な悪化により、五十歳で死去。

文学活動

中学時代に改造社の日本現代文学全集や春陽堂の現代大衆文学全集などのいわゆる円本を耽読した梅崎は、高校に進学すると雑誌部の委員となり、校友会雑誌「龍南」に自作の詩を載せるようになる。すぐに小説も書くようになった。大学進学後の昭和十一（一九三六）年、二十一歳の時に同人雑誌「寄港地」を創刊、この号に小説「地図」を掲載した。これ以後、少しずつ小説を発表するようになっていく。

卒業後も同人雑誌「炎」を作るなどしたが、すぐに召集を受けた。戦争が終わると昭和二十（一九四五）年九月に上京し、友人宅で「桜島」を執筆した。浅見淵に見出され、雑誌「素直」の創刊号（昭二十一・九）に同作が掲載されると、梅崎はまたたく間に作家として名を知られるようになった。続いて「日の果て」（昭二十二）なども注目された梅崎は、当初「戦争もの」を得意とする作家と目されていたし、それらは実際に好評を得てもいた。しかし、その一方で同時期には「蜆」や「偽卵」（ともに昭二十二）などにおいて、敗戦直後の荒廃した風俗や人びとの心理を捉えた作品も書いていた。これらは市井のさりげない片隅の日常にシリアスな笑いをさぐる、いわゆる「市井事もの」と呼ばれる。

「市井事もの」の系列といえる作品には本文や「ボロ家の春秋」以外にも「空の下」（「新潮」昭二十六）、「Ｓの背中」（「群像」昭二十七）、「Ａ君の手紙」（「文学界」昭二十七）、「突堤にて」（「文学界」昭二十九）、「古呂おじさん」（昭三十）などがあり、いずれも寓意性、諷刺性が顕著な特徴となっている。梅崎はこれらにお

いて作中人物の内省的な態度を描き込む傾向が顕著で、そのことから「第三の新人の兄貴分」と評されることが多い。

不安神経症状の治療を終え「狂い凧」を発表した後には、「仮象」（昭三十八）、「朱色の天」（昭四十）などを経て、絶筆となった「幻化」と創作活動は続いた。「幻化」は精神科の病室を抜け出した主人公が九州、特に鹿児島と熊本を巡る長編小説である。それゆえ「戦争もの」と「市井事もの」とが止揚されていると見られる向きがあるが、一人称を用いた文体によって、現実の描写だけでなく記憶や幻覚なども取り混ぜて描き出された一つの世界として読まれるべき作品でもある。

作者を解くカギ

敗戦数年間の梅崎は「戦争もの」を書く一方で、社会の食糧難を背景として、ただ食べるために生きる人生の空虚さや滑稽さを描くことがしばしば見られた。エッセイ「エゴイズムに就て」（昭二十二）では、「生きて行くという事は既に、高度の狡智と他人に犠牲の上にのみ可能である」と述べ、「今の時代はエゴイズムの自覚と拡充から始まる」と宣言していた。こうした、食べることに関わるときに背徳も伴うエゴイズムの発露は、「市井事もの」に分類される「麵麭の話」（昭二十二）や「蜆」にも表れている。

日本社会が食糧難を解消した後に、梅崎は当初の題材を失ったかに見えたが、エゴイズムは日常生活を舞台に他者との関わりにおいて問題化されるテーマとして、「Sの背中」や「ボロ家の春秋」へと展開される。「高度の狡智と他人の犠牲」によって生きる点では戦後初期から通底している。そのテーマは、「狡智」を持たず「犠牲」になる側に視点人物を移し替えた作品とも言える「写真班」にも接続していく。

「写真班」の初出は「新潮」昭和三十一（一九五六）年二月であるが、この時の標題は「侵入者」であり、「写真班」と「植木屋」の二篇で構成されていた。「植木屋」は「参考」に一部を掲載した。両者はともにエゴイズムそのものとは距離を置き、世界と自己との関係をテーマにしているが、「植木屋」では視点人物と侵入者との会話がほとんどないまま家（庭）をいいように占拠される筋立てになっており、自己存在を無視されるという面では「写真班」よりもさらに深刻になっている。

出典

本文は「梅崎春生全集」３（沖積舎　昭和六十）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

参考文献

＊教師用

「戦後史の空間」（新潮文庫）磯田光一　新潮社　平十二

＊初刊は昭和五十八年。敗戦と占領という事態を経た住宅環境も含む日本の諸現象の変化が、人びとの何をいかに変容・変質させたかを問うもの。本書では梅崎春生「ボロ家の春秋」が取り上げられ、一九五〇年代の住宅事情と併せて考察がなされている。

「生きられた家―経験と象徴（新訂版）」多木浩二
青土社　平三十一

＊初刊は昭和五十一年。本書で「家」とは単に住居そのものを指すのではなく、そこに暮らす人間の経験や社会、文化のさまざまな要素が織り込まれた空間を意味している。そのような空間としての「家」をめぐる考察を通して、人間存在そのものについても思索が及んでいる。

「梅崎春生研究　戦争・偽者・戦後社会」高木伸幸
和泉書院　平三十

＊梅崎は従軍するより以前に発表した作品「微生」から遺作「幻化」に至るまで、一貫して社会を諷刺するスタイルを持っていたとし、主要作品を包括的に論じている。第四章第一節では、「写真班」を含む短編「侵入者」の執筆時期に梅崎が米軍基地問題に関心を示していたことを述べ、本作品を戦後の日米関係を諷刺したものと意味付けている。

＊生徒用

「水中都市・デンドロカカリヤ」（新潮文庫）安部公房
新潮社　昭四十八

＊「闖入者」所収。同作品は昭和二十六年に雑誌「新潮」に掲載された。昭和四十二年に発表された安部の戯曲「友達」の下敷きとなった作品で、突然おしかけてきた見知らぬ九人家族に家を占拠されてしまう男の物語である。他者、家、占拠など、本文とも共通するモチーフを多く含んでいる。

「城」（新潮文庫）フランツ・カフカ、前田敬作訳
新潮社　昭四十六

＊未完の長編小説。測量技師Kは、ウェストウェスト伯爵という人物の「城」に雇われ、その所在地である村にやってくる。しかし、仕事は与えられず、Kが「城」にたどり着くことも、そのときどきの状況や事件によって拒まれる。本文のように、他者から突きつけられる不条理にも見える要求や条件に翻弄される個人の姿が描かれている。

「ひとり空間の都市論」（ちくま新書）南後由和
筑摩書房　平三十

＊現代社会ではカプセルホテルやひとりカラオケなど、「ひとり」向けの商業施設が増えている。また、モバイル・メディアの普及は「ひとり」でいることの性質を日々変化させている。そうした人間に関わる空間の現状と特質を、豊富な事例を交えつつ解説している。

主題

自己を取り巻く見えないルール

住居は本来、人間の身体のみならず精神の安住できる場所としてある。しかしながら、そこに侵入してくる来訪者たちによって、その安定が切り崩される。本作品が示しているのは、自己と世界、社会、他者との関係である。非合理ささえ伴って入り込んでくる他者が、自己の存在基盤を揺るがす。そのことによって、普段は意識すらしないような社会のルールや、自己を根拠づける規範の存在が明らかになる。

構成

構成 1

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～ P二二三・3〈「さあ。」〉	日曜日、自宅で過ごしていた「彼」がモリソバを食べていたところ、玄関のブザーが鳴った。ブザーはずっと前の日曜日に、見知らぬ電気屋が強引に取り付けたものだった。それを思い出した「彼」は腹を立てながら玄関の扉を開けると、顎鬚を生やした男とイガクリ坊主の男が立っていた。イガクリは大きな写真機を持っている。「彼」は二人を知らない。顎鬚は「彼」の家の写真を撮ると言い、名刺を「彼」に握らせる。
第二段	P二二三・4〈二人の男は一斉に腰をかがめて、〉～ P二二五・8〈「ではお答えします。外郭団体ではありません！」〉	見知らぬ二人の男が「彼」の自宅に入ってきた。顎鬚の名刺には「金融公庫住宅資料調査社写真班・多々良太郎」とある。男たちは家の中で撮影を始め、「彼」は台所に追いやられてしまう。顎鬚は、自分たちには家を撮影する責任があり、家には撮影される義務があると言う。「彼」が家に義務があるなら家の持ち主にも義務があると言い返すと、顎鬚は「彼」が撮影される義務はないと言う。家は住宅金融公庫から融資を受けていたので、「彼」は男たちの勤め先がその外郭団体か何かなのか、と尋ねると、そうではないと言う。
第三段	P二二五・9〈あまりにもピタリとした答え方だったので、〉～ P二二八・8〈いまいましさを感じた。〉	撮影を続ける男たちを前に、「彼」は電気屋のことを思い出す。電気屋は突然来訪し、家の構造が悪いから玄関にベルかブザーを付けろと言ってきた。そうでなければ来訪者が迷惑すると言う電気屋に対し、「彼」はブザーだと音色が一つで来訪者の正体が分からないことが嫌だと言う。電気屋は、それでは来訪者を疲労させるだけであり、「彼」の身勝手だと抗弁する。そのまま押し切られ、ブザーの取り付けに至ったのだった。その状況が今の状況と酷似していることに気づき、「彼」はいまいましさを感じた。
第四段	P二二八・9〈つまりおれがまごまごと押し戻されてしまうのは――〉～ 終わり	半年前に家を建てたとき、その費用の六分の五を融資や借金でまかなったことを振り返り、「彼」は自分が家の付属物であるような気がしているのだった。撮影を続ける男たちの横で再びモリソバを食べようとすると、イガクリにそれをどけろと言われる。「彼」はモリソバを持って家の端の部屋に移動する。釈然としない気持ちでいると、二人がその部屋にまでやって来て、「彼」を無視して家の庭を品評し始めた。「彼」は何か叫び出そうとしたが、ソバが口に詰まっていて声が出ない。

構成2

◆写真班の論理

写真班――撮る責任
家――撮られる義務
――――（断絶）――――
「彼」――撮らせる義務
　撮られる義務はない
　状況からの疎外

「彼」の不在

←根拠
「彼」＝「彼」
家 ≒「彼」の家
←
◎所有をめぐる論理

◆写真班と電気屋の共通点

・「彼」の存在を無視
・名刺で自らの立場を保証
・「彼」の引き下がり方
　引き下がる理由＝家と経済と所有の関係に対する確信のなさ

◆電気屋の論理と「彼」の論理

・ブザーと「ごめんください」（声がけ）
　電気屋――ブザー
　「聞こえなきゃ意味がない」
　　↓来訪者が損をする
　「彼」――声がけ
　「性格が見当つく」
　　↓住人のための行為

「彼」の不在

※一八〇度異なる観点
◎（電気屋）損得をめぐる論理

◆「彼」の居場所と心情の連関

玄関
・自分に対する腹立ち
・狼狽、混乱
←
台所
・言うことが見つからない
←
茶の間
・来訪者たちと自分とがいまいましい
・自分と家の関係に対する理解
←
次の間・庭（見るだけ）
・曖昧さと向き合う
・「何か」を叫ぼうとするができない

◎家の奥へと追いやられていく状況に比例して、「彼」の状況に対する理解は深まるが、問題は解決しない。

板書例

1　第一段

◆「彼」の状況
・日曜日の昼時
・平日は勤めに出ている
・昼食はモリソバ
・ブザーは不要なもの

◆えたいの知れぬ狼狽
1　来訪者の意図がわからない
2　自分よりも家が優位にある

2　第二段

◆写真班の「責任」と「義務」
責任　命令によって家を撮る
義務　家―撮られる義務
　　持ち主―撮らせる義務
◎持ち主自身が撮られる義務はない
　↓「彼」は不要（「彼」の不在）

◆「彼」の反応
・慌てる
・言うことが見つからない
◎反論できない

3　第三段

◆電気屋の言い分
・家の構造が悪い
・来訪者の声が通らない
・来訪者にとって迷惑
・来訪者が疲れる＝損をする
　⇔損得勘定
　住人だけが得をする

◆「彼」の言い分
・ブザーの音が嫌い
・声を聞けば来訪者の性格がわかる
・ブザーでは相手がわからない

◆「彼」の反応
うんざり
↓混乱、顔が赤くなる
↓肩を押されても無抵抗
◎反論できない

両者の違い
電気屋＝来訪者目線
「彼」＝住人目線

第四段

◆「彼」と家の関係
「自分がこの家の付属物」
↓家が自分の持ち物と言えるかわからない
◎所有を根拠づけているのは金銭
↓家における自分の重要性もわからなくなる

◆「光を発さない光源体」
＝本来の重要な特徴を失っている
↓存在すること自体の根拠を失う

◆モリソバは何を表しているか
〈第一段〉ただ食べている
〈第二・三段〉登場しない
〈第四段〉
1　伸びて固まっている
「食べ残すわけにはいかない」
↓今の自分が唯一持っているもの
2　写真集に写り込むと不都合
↓理想的な住宅のイメージに合わない
◎日常生活の象徴
3　「彼」の声が出ない

4 ←
◎日常そのものが「彼」に立ちはだかり、自己存在の問い直しを迫る。

発問例

・「導入の問い」のねらい

あなたの持ち物があなたのものであると、どのように証明できますか。

（ねらい）家族や親しい人でなく、他人に証明することを念頭に置く。証明の方法をいくつか出し、それを疑う人からの反論も考えてみる。自転車やペットの鑑札など、公的機関に登録されていれば証明できるが、自分の実感とは程遠い。しかしそれでも、それがなければ、究極的には証明できないケースもある。日常の確かさへの疑問から、現代生活の不安を描いた作品への導入とする。

●二二一ページ

問 **ブザーの音が「重苦しく」（1行目）と表現されていることから、どのようなことが考えられるか。**

答「彼」にとって快い音ではないこと。また、「彼」が積極的な人付き合いをしていないこと。

補今後の物語展開について不穏さをイメージさせる効果もある。「彼」の内面と物語全体との両面における意味合いを考えることが可能である。

問 **◉「ブザーの音をほとんど聞いたことがない。」（3行目）から、「彼」にとってブザーがどのようなものだと分かるか。**

答あまり使わない、必要のないもの。

補この後、「この間の電気屋だって…」（二二五・14）から、ブザーが電気屋に半ば強制的に取り付けられたということが語られていくが、不要なものであることで、「彼」の怒りや滑稽さは際立つことになる。

問 **「腹を立てながら」（9行目）玄関に出たのは、なぜか。**

答ブザーの音が不快であることに加えて、不要なブザーの取り付けを許した自分を思い出したから。

●二二二ページ

問 **「鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた」（5行目）という顎鬚の態度から、どのようなことがわかるか。**

答「彼」に対しては礼を欠いても構わないというような、横柄さや「彼」を軽んじる様子。

問 **◉「えたいの知れぬ狼狽を感じ」（16行目）たのは、なぜか。**

答写真班が「彼」よりも家を重視しており、また、「彼」の家であるのに、その許可なしにものごとを進めようとしているから。

●二二三ページ

問 **「彼」が顎鬚の名刺に「急いで」「視線を走らせた」（5行目）のは、なぜか。**

答彼らが何者か早く理解したかったから。

●二二四ページ

問 **顎鬚が「いやに」はっきりと「大丈夫ですよ。」（5行目）と言ったのは、なぜか。**

答顎鬚は自分たちが家の写真を撮る明確な理由を持っているから。

補ただし、その理由は彼らにとってだけ合理的なのであって、一般的な了解は得られないものである。

●二二五ページ

問 **「あんたはまるまるあんただからだ。とこ ろがこの家はそうでない。」（2行目）とは、どういうことか。**

答「彼」の持ち主は「彼」自身だが、家の持ち主が誰かは分からないということ。

補直前で家の「持ち主」という言い方を顎鬚がしていることに注目する。

問 **◉「肩や背中から急に力が抜けていくような感じ」（11行目）は、事態に対する「彼」のどのような感じ方を表しているか。**

答 もはやどんな抵抗をしても無駄なのではないかという空虚感。

補 身体的な反応で実感的に表している。

問 **「目を吊り上げて、唇の端に泡を少し出して」（16 行目）いることから、電気屋のどのような様子が分かるか。**

答 単に怒っているだけでなく、怒りのあまり興奮している。

●二二六ページ

問 **「彼」が「うんざり」（8 行目）しているのは、なぜか。**

答 名乗らず用件も言わない相手に怒りをぶつけられる理不尽さに加え、軽蔑したような態度を取られ、自分の家を侮辱されたから。

●二二七ページ

問 **◉「現に僕がさっき何度、…思います？」（4 行目）には奇妙な理屈が含まれている。それはどのようなことか。**

答 「彼」は電気器具を求めていない。電気屋が自分の都合で訪問しているにもかかわらず、相手に行為の責任を負わせ、迷惑をかけられたと決めつけていること。あるいは、玄関からの呼び声が聞こえない事態は、電気屋が意図的に引き起こしたにもかかわらず、ブザーを設置しなければならない不便さがあらかじめ存在しているように言いくるめているから。

問 **◉「ブザーやベルの音は嫌い」（8 行目）なのは、「彼」がどのようなコミュニケーションを望んでいるからか。**

答 「ごめんください、という声を聞けば、…わけにはいかない」（二二七・10～二二七・11）、「友達のブザーも、…よっぽどいい」（二二七・12～二二七・15）から、どんな人でも均質なブザーの音に変換されるのではなく、その人の個別性を認識した上で関わりたいと思っている。

●二二八ページ

問 **「その自分の引き下がり方が、今のこの写真屋の場合とそっくりだ」（7 行目）とあるが、どのようなところが似ているのか。**

答 相手の理屈を封じるような反論ができず、言葉が出てこないままに家への侵入を許しているところ。

問 **「その不安定なもの」（12 行目）とは、どのようなことか。**

答 自分が家を所有しているという確信が持てないということ。

●二二九ページ

問 **「すべての因がそこにあるようであった。」（1 行目）とあるが、「彼」は何に気付いたのか。**

答 家を建てたときから抱いていた落ち着かない気持ちや、電気屋や写真班に何を言われても言い返せないことの原因が、購入金額の多くを借金が占め、自分のお金で支払ったのではない点にあったということ。

問 **◉「自分がこの家の付属物であるような」（2 行目）気がするのは、なぜか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 敷衍すれば、借金を返すまでは働き続けなければならず、自分の意志で家やものを動かしているというよりは、家に自分の人生が従わされているようだから。

問 **「まずいけれども食べ残すわけにはいかないような気持ち」（6 行目）とは、どのようなものか。**

答 ソバだけが自分の持ち物であるような気持ち。

補 家を所有しているという自信を失った「彼」にとって、今や目の前にあるソバだけが所有できるもののように見え、それを食べ残

すということは所有物に対する自らの権利を放棄するような気持ちになっている。「ザルを持って立ち上が」るのもその表れと見ることができる。

問 **◎「僕をどけろと言うんですか。」（10 行目）と勘違いしたのは、どのような気持ちになっていたからか。**

答 「彼」は借金をして家を買っており、家のすべてを自分のものだと言えるか疑わしくなっているから。

補 自分は、家や家具のような「もの」に対して主人であるはずだが、棟木やガラス窓と等価値であるかに感じ、その存在の重要性に自信が持てなくなっていたから。

●二三〇ページ

問 **◎「光を発さない光源体みたいな感じ」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 あるものが、他でもないそれであることを示すもっとも重要な特徴や性質を欠いている状態。不条理でもあり、無意味でもあり、滑稽でもある。

補 この表現によって、自己存在の混乱は深遠なものとしてイメージされるが、その打破が、ソバという卑近なもので妨げられるところにユーモアがある。

問 **「そいつをぶち破る」（14 行目）とは、どのようなことか。**

答 写真班に反論することと、自分が置かれた状況を打開すること。

補 複数の意味が込められている。

語句の研究

●二二一ページ

1重苦しく鳴り響いた。　小説の冒頭には作品全体の方向性が示されていることが多い。ブザーの音を「重苦し」く聞いたのは「彼」であることを示すと同時に、読者に対してもブザーの音がこれからの物語の展開を予期させるものとなっている。

1茶の間　和風住宅において、食事と家族のだんらんに使われる畳敷きの部屋。「台所の隣にあるのだ。」（二二一・6）とあるが、これは通常の様式である。

キー・ポイント　モリソバ　ゆでて水にさらして締め、せいろや皿などに盛りつけた蕎麦。そばつゆにつけながら食べる。本文では一貫して「モリソバ」あるいは「ソバ」と表記されている。似非外来語のようなカタカナ表記によって、（盛り）蕎麦が一般的な語義を超えて特殊な意味を持った一つのモチーフとして成り立っている。なお、「彼」は蕎麦を「ザル」（二三〇・1）に盛っている。

2よたよたと　足の動きがしっかりしていないさま。

3日曜日には来訪者はめったになかった　ここから物語内時間が確定できる。本作品の冒頭部には時間・空間など舞台の設定が凝縮されている。

5玄関のブザーと書いた　「書いた」という叙述によって、物語の書き手の存在を想起させられるが、こうした箇所はここだけである。

8おマケ　「御負け」が語源。店員が客との駆け引きに負けて値を下げる行為を指していたが、のちに商品以外の物品を追加する行為も指すようになった。

9擦過し　かすめるように近くを通り過ぎること。

キー・ポイント　それにそれを許容した自分自身もだ。　理不尽に見える来訪者に対してだけでなく、自分にも怒りが向けられていることを、「彼」の人となりを見るうえで注意しておきたい。

●二二二ページ

1も一人　もう一人。「う」が省略されることで軽妙さが生み出されている。

2写真機　カメラ。現在主流となっているコンパクトデジタルカメラではなく、旧式のロールフィルムカメラ（二二四・図版）をイメージしたい。

キー・ポイント　鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた。　人に挨拶をするときは帽子を脱ぐのが礼儀とされる向きがあるが、顎鬚は「彼」に対してそのようにしていない。この態度からは顎鬚の無礼さや不遜なさまよりも、「彼」の非人間的な扱われ方を見た方がよいだろう。

7いぶかしく　疑わしくの意。

7反問　何か尋ねられた時、こちらから逆に尋ね返すこと。問い返すこと。

14「近頃の建築はどこでも玄関が小さいのだよ。」　「彼」の家が比較的新しいことが、顎鬚の発話によって示されている。

●二二三ページ

2お心使い　「お心遣い」と表記すべきところではあろうが、原文ママとした。配慮の意。

4一斉に　そろって、同時に。

6押しとどめる　ある行動に出るようとするのを制止すること。

8余儀なく　やむをえずの意。そうせざるを得ないさまを示す。

11顧みた　振り返って後ろの方を見るの意。

14吟味するように　念入りに調べるように。

●二二四ページ

5 顎鬚がいやにはっきりした声を出した。　「いやに」には「妙に」（異常であるさま）と「ひどく」（程度が甚だしいさま）の意味があるが、ここは両義的である。

5 あなたを撮るのではなく、家を撮る　顎鬚はここで「彼」に「あなた」と呼びかけているが、直後には「あんた」（二二五・1）と変わっている。この間に顎鬚の「彼」に対する建前上の敬意すらも失われたことがわかる。

キー・ポイント　わたくしたちは命ぜられて、家を撮影する責任がある。　顎鬚が使う一人称複数形は、ここでの「わたくしたち」に加え、「わたしたち」（二二四・11）、「我々」（二二四・12）と多用である。「わたしたち」が最も一般的な表現だとして、「わたくしたち」はかしこまった物言いをするのに使われ、「我々」は「わたしたち」よりも改まった謙称ではあるが、顎鬚の発言では「彼」に対して居丈高であることを表す効果をもたらしている。

7 お給金　給料として支払われる金銭。給料、給与に同じ。

9 三脚　カメラや望遠鏡などをのせるための三本足の台。脚は伸縮・開閉でき、持ち運びに便利な形をしている。

12 融資　資金を必要とする人に貸借すること。

●二二五ページ

2 掌を打ち合わせた　両手の手のひらをぶつけ合わせたの意。当然ながら音も立ったと見てよい。質問を重ねる「彼」に対する顎鬚の威圧的な態度の一つである。

6 住宅金融公庫　住宅建設資金や土地、借地権を取得したりするための資金を融通する政府金融機関。第二次世界大戦後の住宅難から昭和二十五（一九五〇）年に設立された。顎鬚の名刺に記載された「金融公庫」（二二三・5）とは名称が異なる。

キー・ポイント　あまりにもピタリとした答え方だったので、彼は二の句が継げずたじろいだ。　「ピタリと」はきちんとした強い調子で物事をするさま。「たじろいだ」はひるむの意。この一文で、威圧的な顎鬚と、その勢いによって意気を削がれる「彼」との対比関係が簡潔に示されている。

12 いまいましい　腹立たしい。靴を脱がなければではなく「脱がさなきゃ」（二二五・12）と言う限り、この気持ちは「彼」自身に向けられている。

15 もう少し　既に少しの意。

●二二六ページ

3 奥の間　家の奥の方にある部屋。奥座敷。

4 コマギレ住宅　コマギレは細切れとも小間切れとも書き、いずれにしても「彼」の家の小ささや狭さの謂いである。屋内が細かく区切られた住宅。

5 控えの間　来客用の部屋、主の部屋といった主要な部屋に隣接し、家の使用人が待機場所として使用する小さい部屋。

キー・ポイント　ベルかブザー　ベルは、鐘や鈴、またはそれに似た音を出す装置のこと。ブザーは電磁石で振動版を振動させて音を出す装置。電気屋は最初「ベルを付けなさい」（二二六・7）と言っていたが、途中からブザーを取り付ける方向に転換している。これはベルでは「家が小さすぎる」（二二六・10）からである。ここでも「彼」の家の小ささが強調されている。

●二二七ページ

キー・ポイント　電気屋の残った足も上に上がってきた。　足自体が一つの生き物であるかのように擬人的に表現することで、電気屋の体の動きと発話を切り分けつつ、双

方が同時に進行していることを効果的に示している。このように、体のパーツを人物と切り離すような表現は、「ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。」（二二二・3）、「イガクリはしきりに手足や機械を動かした。」（二二四・14）などにも見られる、この作品の特徴である。

3 三寸　およそ九センチメートル。

10 おおよその性格が見当つく　はっきりしていない来訪者の性格について、大体の予想ができる。

13 保険勧誘人　現在は「生命保険外交員」、「生命保険外務員」と呼ばれる。生命保険会社に所属し、家庭や会社などを回ってその会社の保険契約の締結を媒介する者のこと。

16 失笑　笑ってはならないような場面でおかしさに堪えきれず、吹き出して笑うこと。

●二二八ページ

キー・ポイント　トクをするのはあなただけじゃないですか。　来訪者の声がけという行為をめぐって、それを損得で捉える電気屋に対しては、表記においても違和が表明されている。それが「トク」というカタカナ表記である。来訪者の肉声を聞いて何者かを見定めたいという「彼」の欲望は、損得勘定を根底に据えていない。ゆえに電気屋の理解は「彼」の発言の要点を無視し、話を逸らす以上のものではない。こうしたずれは電気屋だけでなく写真班の二人にも見られる。

6 うやむやのうちに　事態がはっきりしないままに。この中には、来訪者の肉声かブザーかという議論の決着と、ブザーを取り付ける手続きとの両方が含まれる。

キー・ポイント　つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは　「押し戻され」るとは、電気屋に肩を押されたという身体的、現実的な内容を指すと同時に、電気屋や写真班の発言の勢いに対抗することができずにいる状態をも指す。「つまり」という語には、電気屋に実際に肩を押された経験と、現在の自分の立場とを重ねて捉え、後者が持つ意味合いを「彼」が了解した瞬間が示されている。

12 その不安定なもの　家が自分の所有物であるという明確な了解を持てていないことを指す。

16 まつわり　つきまといの意。

16 物腰　態度。

●二二九ページ

1 因　物事の原因。

5 その二筋三筋を引き剝がして　「引き剝がす」ことからは、それだけの時間の経過があることが窺える。また、蕎麦が日常の象徴であるとすれば、「彼」をめぐる物事がスムーズに進まないことや、「彼」が思うように行動することの困難を示しているとも見える。

キー・ポイント　やはり少し声が高くなった。　この直前まで電気屋に関する回想場面が差し挟まれているため、物語内現在において直前の「彼」の発言は「これは住宅金融公庫の、外郭団体か何かですか？」（二二五・6）まで遡らねばならない。すると、「やはり」の語は前の発言との比較においてではなく、回想を経た「彼」自身の気付きの内容に関わるものとして読むべきである。家と自分との関係の不確かさに対する苛立ちと不安とが、「少し声が高く」なることと繋がっている。

12 なだめるように　怒りや不安などをやわらげ静めるように。

15 具合が悪い　体裁が悪い。都合が悪い。

16 肩をそびやかして　肩を高く上げ、威勢のよさそうな態度を見せて。直後に「すぐに肩を元の高さに戻した。」（二二九・16）とあり、虚勢に過ぎなかったことがすぐさま明かされている。

●二三〇ページ

1 次の間　主要な部屋に隣接する部屋。「彼」の家の場合、茶の間が主要な部屋に該当する。「部屋はもうこれだけしかない。」（二三〇・1）とあることから、茶の間をダイニングルームと捉えれば、いわゆる１ＤＫの間取りであることが窺える。また、電気屋に対して「彼」が言った「奥の間」（二二六・3）はこの部屋のことである。

3 不法なこと　道理や道義に背くこと。

キー・ポイント　**彼はそれを全部無理やりに口の中に押し込んだ。**　蕎麦は伸びて固まっており、それを「彼」自身が既に「ひどくまずい」（二二九・6）とも言っていたにもかかわらず全て頬張ったのは、「食べ残すわけにはいかないような気持ち」（二二九・6）があったからである。

11 しげしげと　物をじっと見つめるさま。つくづく。よくよく。

13 植木市　植木屋が栽培した植木や草花、盆栽、苗木などを持ち寄る露天市。十八世紀から盛んになり、主として寺社の縁日などに立つ。

14 光源体　それ自体で光を発する物体。発光体。

キー・ポイント　**何か叫び出そうとしたが、口いっぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど声にならなかった。**　写真班が自分の家の最奥にある庭の存在を認識し、あまつさえそれを品評するような物言いさえするに至り、「彼」と家との所有をめぐる繋がりは完全に切り離されたかに見える。さらに、「彼」の存在自体が無視されていることも相まって、事態はより深刻になっている。それゆえ、「彼」は状況に抗おうとするが、どのように抗うかという方略はこれといってなく（「彼」が叫ぼうとした内容は「何か」とあるとおり、不明のままである）、方略があったとしても遂行するための手立てを奪われている（「ほとんど声にならなかった」）。こうした状態に導いたものは、「彼」の思惟（が思うように巡らないこと）と蕎麦であり、写真班の二人だけが直接的な原因だとは見做しにくい。勤め人の男性が日曜日の昼に食べるものとして、蕎麦は決して珍しくはない、平凡なメニューである。「ソバ」が「彼」の声を奪うという事態は、これまで疑うこともなかった自らの日常が「彼」に立ちはだかり、生存条件が不確定であることの問い返しを迫ったと見ることもできる。

注意する語句

（＊で用例を示した）

赤ら顔…赤みを帯びた顔。日焼けや酒焼けなどで赤らんだ顔。また、血色のいい顔。
＊彼は扉を少し開け、その赤ら顔をのぞかせた。

たしなめる…よくない点について指摘する。
＊上司にやんわりとたしなめられた。

狼狽…慌てふためくこと。うろたえる。
＊思わぬ結果に狼狽する。

しゃにむに…なにごとも気にかけず、がむしゃらにやるさま。ひたすらに。むやみに。
＊しゃにむに働く。

後退り…恐怖や警戒から、前を向いたまま少しずつ後ろにさがること。あとずさりに同じ。
＊犬に吠えられ、思わず後退りした。

口を入れる…他人のことに干渉する。口をさしはさむ。
＊仕事の話に口を入れてほしくない。

念を押す…十分に注意して確かめる。重ねて注意する。
＊忘れ物をしないように念を押す。

二の句が継げない…呆れや驚きで次にいう言葉が出て来ない。
＊怒鳴られて二の句が継げなくなる。

目を吊り上げる…怒っているさま。目に角を立てる。
＊無神経な言葉に彼は目を吊り上げた。

いきり立つ…憤怒し、興奮するさま。
＊理不尽な要求に群衆がいきり立つ。

うんざりする…同じことが何度も繰り返されたり、同じ状態が続いたりして、あきあきするさま。
＊彼女のわがままな言動にうんざりする。

踵…かかと。あくつ。あくと。
＊踵を揃えて立つ。

身勝手…自分の都合や利益だけを考えて行動すること。自分勝手。
＊身勝手な言い分に腹が立った。

身をよじる…体をひねるようにくねらせる。
＊悲しみに身をよじって泣いた。

いまいましい…ひどく腹立たしい。癪に障る。
＊突然の雷雨に、彼はいまいましげに空を見つめた。

まごまご…どうしてよいかわからず、うろたえるさま。
＊入り口が見つからず、まごまごした。

しょぼしょぼ…力なく、あわれでわびしいさま。
＊悪いことが重なり、しょぼしょぼと帰路につく。

目障り…見て不愉快なこと。また、そのものや、そのさま。
＊駅前の看板は目障りだ。

目を白黒させる…苦しみで目をしきりに動かす。
＊餅をのどに詰まらせて、父は目を白黒させた。

鑑賞

「写真班」には、作者・梅崎春生の特徴的な資質とも評される寓意性とユーモアが存分に認められるだけでなく、戦後日本社会のあり方や、戦後を生きる人間存在のあり方までを射程に入れた作品である。以下にこれらの観点を通して作品を鑑賞してみたい。

寓意性とユーモア

冒頭のブザーやモリソバといったアイテムは、それぞれ「彼」の存在自体を脅かす装置となっている。しかし、「写真班」ではこうした単独のモチーフだけが寓意として機能しているのではない。全体の構成を見た時に、「彼」が家の奥へと追いやられるほどに、現実で立場を失っていることに比例して、「彼」の内側では自己と家とをめぐる思索が深まってゆき、最終的には人間存在それ自体の不安定性に至りつく。こうした構成の妙も評価できる点だろう。

うっすらとではあるが、自分が何者かということが分かってきた「彼」は、実際には次の間の真ん中で来訪者に無視されながら、口いっぱいに蕎麦を詰め込み、言葉を失っている。ここにペーソスとユーモアとが同時に立ち上がる。梅崎のユーモアについて、彼を「否定的なものを否定的に描く作家」（『物語戦後文学史』昭三十五）と規定した本多秋五は次のように述べている。

> 否定的なものは、自己の外部にあるばかりでなく、自己の内部にも牢乎としてある。そこから笑いが生れる。笑いは、対象の否定的性質を批判し、乗り超えるものであると同時に、その不可避性を承認し、それを許容し、宥免するものでもある。

これに倣えば、「写真班」のユーモアは理不尽な来訪者たちよりも、むしろ「彼」自身を源泉とすると言えるだろう。

戦後日本社会を照らす「写真班」

住居を舞台とした梅崎春生の作品には、「写真班」と対になっている「植木屋」に加え、直木賞受賞作である「ボロ家の春秋」がある。いずれも家を所有するということが問題となっていて、どの作中人物もそれが上手くいかない。また、これらの発表時期は、いずれも経済白書が「もはや戦後ではない」と謳った昭和三十一（一九五六）年前後である。経済的にはそのように了解される時代ではあったが、戦後社会の中で住宅面の復興だけが著しく立ち遅れていたことは、経済白書でも指摘されていたし、前年に日本住宅公団が発足したこともその傍証となろう。

「写真班」の「彼」の家は新築だが、借金を重ねて苦労して建てたにもかかわらず、作中では狭さばかりが強調されている。電気屋に「たかが十四五坪程度」と愚弄される「彼」の家は、その実公営住宅の基本的な間取りと大差なく、当時の日本にありふれたサイズの家だった。こうしたリアリティも作品には呼び込まれている。

日沼倫太郎は、梅崎が「社会を比喩として描こうとする」試みの初発のものとして「Sの背中」を挙げている（「梅崎春生論」昭三十二）。梅崎自身が戦争文学を放棄した理由について、「どうも本当のことを書いていない、ウソを書いている」と述べたのは、昭和三十（一九五五）年だった（「私の創作体験」）。「もはや戦後ではない」と言われた時期と、作家が創作方法を転換した時期とがまさに重なっている。社会そのものを比喩で表現することは、

戦争小説の執筆と同時並行で以前から行われていたが、それが主要なテーマとして前面に出てくるのが「写真班」執筆の時期であり、住居とはそのための格好のモチーフだったと言える。

戦後を生きる人間存在のあり方

しかしながら、「「もはや〝戦後〟ではない」というのは、外部の世間のことで、梅崎さんの内部では〝戦後〟は最後までつづいた」（安岡章太郎「不如意な同居」昭五十四）といった指摘もあり、かつ重要である。それは作品の表面に現れる舞台や事物ではなく、梅崎が描く人間そのものに関わっている。

「彼」は平凡な勤め人であるはずだった。それが、融資を受けて家を建てたというだけの理由で、その所有に疑義が呈され、「彼」自身もその疑義を内面化してしまう。自分の持ち物で、さらには公との繋がりを一時的に解除し、無防備でも安心して過ごせるはずの場所、そうした空間を容易に侵犯される危うさが描き出されることによって、その安心が社会との契約、ルールの共有によってのみ有効なものでしかなかったことが告げられる。融資を受けずに新築のマイホームを建てられる人が、現代日本にどれだけいるだろうか。これは「彼」一人の問題ではない。

分析に耐える寓意性とユーモア、同時代状況に置き直した時の読解の広がり、現代社会に生きる人間の実存を問う普遍性、こうした多様な「読みどころ」があるのが「写真班」である。

参考

・「植木屋」（抄）　梅崎春生　新潮社　昭和四十八（初出・昭和三十一）

「旦那。こいつはいい庭になりますぜ。ようがす。あっしに任しておくんなさい」

「庭？」

庭をつくるなんて思いもよらなかったし、そんな趣味も全然なかったし、彼はびっくりした声を出した。

「ええ、庭ですよ。この空地は地味と言い、広さと言い――」

「おいおい」と彼はさえぎった。「こんな猫の額のような――」

「いや、広けりゃ広いし、狭けりゃ狭いで、ちゃんとやり方があるんでさ」植木屋は自信あり気に断定した。「あっしなんかには、このくらいの広さが手頃でさ。ようがす。ひとつあっしが身を入れることにしましょう」

「おいおい、早合点しちゃ困るよ。まだ庭をつくるとも何とも――」

彼も下駄をつっかけて庭へ降り、そのでこぼこの空地を踏みしめながら、そう言いかけて振り返った時、もうその植木屋の姿は濡れ縁には見えなかった。早呑み込みして、さっさと退散して行ったものらしい。その日はそれで済んだ。

それから四五日して彼が会社から戻ってくると、留守番の婆さんがあたふたと彼に報告した。

「何だかへんな人が来て、庭に樹を植えて行きましたよ」

「植木屋だろう」

彼は濡れ縁に出て見た。庭のまんなかにぽつんと椿の木がつっ立っている。へんてつもない恰好の椿であった。

「困った奴だなあ」彼は嘆息し、そして婆さんに言いつけた。「今度僕の留守にやってきたらだな、勝手に樹を植えたり庭をつくったりしても、代金の方の責任は負わないぞって、そう言っといて呉れ」

また一週間ばかり経った。彼が会社から戻って来ると、椿に並んで百日紅が植えられ、庭の隅には孟宗竹と南天が植えられていた。彼は婆さんを呼びつけて訪ねた。

「代金の責任は持たないと、植木屋に言って呉れたかね？」

「言いましたとも」婆さんは口をとがらせて答えた。「そうしたら、お代の方は心配なく、なんて言ってましたよ。ある時払いで結構だって」

「ある時払い？」彼は庭を眺めながらおうむ返しに言った。庭に植えられた樹々は、ひとつひとつを見れば一応の恰好をしているが、こう並んでみると妙に不調和な感じがした。眺めているだけでも面白くない気分になってくるので、彼は早々に鑑賞を切り上げて濡れ縁を退散した。

また四五日目に松と柿が植えられ、次にはザクロと紅葉が植えられた。ザクロは赤く割れた実を点じていた。また一週間も経つと、ラカン槇に梅に沈丁花があたらしく姿をあらわした。どしどし樹が殖えて行くので、彼は面白くもあり、また気味悪くもあって、下駄をつっかけて庭に降り、樹をひとつひとつ点検して廻った。最初四五本の時は不調和だったが、こんなに沢山になると何

か雑然とした面白さが出て来るようでもあった。彼は嘆息して、婆さんに冗談を言った。

「植木屋の奴、僕のうちに森林でもつくるつもりかな」

婆さんは聞えなかったのか、ぶすっと横を向いて返事をしなかった。

（中略）

次の日曜日の夕方、彼が茶の間に寝そべっていると、濡れ縁の方からとぼけたような声がした。

「旦那。旦那」

見ると腹がけどんぶり姿の男が立っている。見覚えのあるような、ないような、ぼんやりした漢字の男であった。

「旦那はザクロの実を食べたね」

それで植木屋だと判った。

「食べたよ」と彼は答えた。

「いけないね。ザクロなんか食べちゃいけないねえ」

「いけないか」

「いけないよ。ザクロは食うもんじゃねえ。あれは眺めるもんだ」

「そうか」彼は頭をかいた。「あんまり旨そうだったからな。じゃもうザクロを食うのはよそう。柿にしよう。」

「柿？」

植木屋はぎくりと棒立ちになったようだった。そして何を思ったか、そのまま彼の視界をふらふらっと横に切れた。

濡れ縁に出て見ると、もう植木屋の姿はどこにも見えなかった。庭には雑然と樹々がむらがり立っているだけであった。

「おかしな植木屋だな」彼はひとりごとを言った。「まるでイタチみたいだよ」

次の日勤めから戻ってきて庭に立ち、樹群を眺めているうち、彼はふっと柿の木が見当たらないのに気がついた。あわてて見廻すと、ザクロも忽然と姿を消していた。彼は大声で婆さんを呼んだ。

「婆さん、婆さん。ここに生えていた柿とザクロはどうしたね？」

「今日の昼、植木屋さんが掘り起して運んで行きましたよ」

「運んで行った？」植木屋に詰め寄るつもりで彼は婆さんに詰め寄った。「どういうわけで運んだ？　何か言ってたか？」

「へえ。ザクロや柿はこの庭にはあまり似合わないんだってさ」

そして婆さんはぼやくように言葉をつづけた。「ほんとにいけすかない植木屋たちだよ。植えたかと思うと運んで行くし、いっこうに落着きがない」

「運んで行ったのは、それじゃこれが初めてじゃないのか？」

「そうですよ」婆さんはぼったりとうなずいた。「入れかわり立ちかわりだから、庭の掃除もたいへんだねえ」

彼は何か言おうとしたが、すぐ思い直して下駄をつっかけ、庭に出た。小森林をなす庭樹のかずかずの、そのひとつひとつを調べて行くと、そう言えば最初の日に植えられた椿や百日紅の姿はなく、その跡には青桐が枝をひろげていたり、孟宗竹が茂っていたところには泰山木がぬっとつっ立っていたりして、彼をおどろかせた。（何でまた俺はうっかりしていたのだろう）朝夕ただぼんやりと庭樹を眺め、眺めるだけで済ましていたのだが、それの内容が次々変化しているとは今まで全く気がつかなかった。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　作中人物がどう呼ばれているか確認してみよう。それは、人物がどのように捉えられているからか、彼らの言動と合わせて考えてみよう。

【答】　顎鬚、イガクリ、電気屋というように、見た目の特徴や職業で呼ばれている。人間が統一的な人格というよりは、ひげや髪型という部分でしか認識されておらず、電気屋は職業的な役割としてしか捉えられていない。写真班が「彼」を無視して写真を撮る、電気屋が不要なブザーを売りつける行為は、「命ぜられて、家を撮影する責任がある。それでお給金をもらっている…義務がある」（二二四・6）、「あなたの義務ですよ」（二二六・7）など、仕事や義務、利益にのみ忠実であることが示されている。そうした人間らしさの喪失が、部分化、職業化した呼び方と関連して強調されている。

2　「小さな玄関だなあ」（二二二・13）「おもしろいところに台所があるな」（二二三・12）「ずいぶんごちゃごちゃと樹が生えているねえ」（二三〇・12）などの写真班の家に対する評価は、なぜ「彼」を不安にさせるのか、考えてみよう。

【答】　これらの批評によって、「彼」の家が、一般的なあり方から外れているのではないかと思わされるから。また、「彼」のものであるはずの家に対して介入してくるからには、相手が家に対して何らかの権利を持っているのではないかと思わされるから。

▼ポイント▲　写真班の家への評価は、否定的とみなせる（「おもしろい」も変わっているという意味で使用されている）。そのため、「彼」は現状肯定感を抱けない。

3　「彼」の家の特徴を整理し、「彼」がどのように家を入手したかをまとめ、自分のものだと言い切れないことに、どのような事情がかかわっているか、考えてみよう。

【答】　「小さな玄関だなあ」（二二二・13）、「狭い土間」（二二三・7）、「廊下も狭い」（二二三・9）、「たかが十四五坪程度のコマギレ住宅」（二二六・4）など、何回も小さい家であることが指摘されている。その小さな家を、彼は借金して手に入れている。彼の家族関係などは一切わからないが、家は、家族から受け継ぐようなものではなく、無理をして買わなくてはならない状況なのだとわかる。家は画一化し、歴史的な愛着が抜けており、借金をしていることからも、自分のものだという確信が持てなくなっている。

▼ポイント▲　「家」は、自分らしくいられる心的空間であり、同時に質量があり、売買されるモノでもある。その矛盾や、この時期の家族形態や住宅事情の変化などが、「彼」の不安を招来していることを理解する。

4　写真班のエピソードと、電気屋のエピソードは、どのような関係になっているか、内容の類似や相違、語られる順番などから整理してみよう。また、両者が描かれることには、どのような効果があるだろうか。

【答】　どちらも、「彼」が望まないことを、理屈をつけて無理強いし、人の持つ権利や義務について考えさせる点で類似している。ただし、電気屋がブザーをつけたことにより、写真班に対応するはめになったという因果関係もある。これらは、エピソードが起こった順番に語られるのではなく、写真班が来た際に、電気屋が来た過去が思い出され、関連付けられていくという形式によって両立している。二つのエピソードが畳みかけるように描かれることで、「彼」の不快感は倍増している。また、単発的な出来事ではなく、社会の傾向として示すことに効果を上げている。

▼ポイント▲　内容だけでなく、できごとが語られる順番に注意し、「彼」の焦燥感の倍増がどのような表現の工夫によって印象づけられているのかを考える。

5　「ソバ」が出てくる箇所を抜き出し、どのようなことを表しているか、考えてみよう。

【答】　「ソバは伸びて…気持ちが別にある。」（二一九・5）
「思い切ったようにまずい残りソバを…口の中に押し込んだ。」（二三〇・6）
「口いっぱいに…声にならなかった。」（二三〇・15）

まず、ソバは時間が経つと伸びるので、望まない客が来てなかなか食べられない時間の経過を表している。また、「彼」はまずくなっても食べなくてはいけないように感じており、最後は自分で口に入れたために声が出せない。自分にとって不愉快なことにも自ら従ってしまう人間の理不尽さや、そのことへの不安などを読み取れる。

▼ポイント▲　ソバは、気軽な食事として選ばれたはずである。それが不愉快な質感を増してくることで、日常を深刻な空間にしてみせる作品の小道具として、効果を発揮している。

言葉と表現の解答例

1　「親指」「足」「肩」など、体の部位で作中人物の動きが表されている部分を探してみよう。それらは、どのような印象を読者に与えるだろうか。

【答】
「ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。」（二二二・3）
「イガクリも体を斜めにして、片足だけを踏み入れた。」（二二二・11）
「イガクリはしきりに手足や機械を動かした。」（二二四・14）
「上がり框に片足かけた。」（二二六・14）
「電気屋の残った足も上にあがってきた。」（二二七・2）
「電気屋は失笑して、右手を伸ばして彼の肩を押すようにした。」

（二二七・16）など。

解釈の一例として、手足などの部位が、人間の意志による統一から外れて動いているようであり、それは機械と並べられもする。映像や漫画のコマのような、描写のメリハリをつける表現でもあり、また、人間らしい感情のコミュニケーションが失われている印象も与える。

▼ポイント▲　「学習のポイント」1と合わせて、全体が無機的に感じられる表現の工夫を考える。

言語活動の解答例

1　時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、話し合ってみよう。

【答】　生徒の発言の中から、読解を深めていく活動。①用事のある人が電話やメールの先触れもなく直接訪ねてくる。②玄関のブザーが現在のようにモニター機能がついていない。③借金して家を新築している。などが挙げられる。①や②で、テクノロジーが現在に比べると発展段階であることは、人と人が顔を合わせる昔ながらの付き合い方がより多く残っており、機械を通した人間関係の画一化への違和感が大きかったことを考えさせる。③は、借金を返済できる未来までの時間、お金を作るために働き続けられる環境が前提であり、経済的に成長しつつあった日本の状況が推察されるが、そのために人々が労働に縛られている状況だとも言える。自分の存在への不安感は、どの時代でもあると言えるが、ここでは特に、大きな社会のシステムに巻きこまれることで生じる人間の不安であり、特定の歴史的状況もかかわっていることを考えさせる。

2　自分の行為が他人に決められていると思うのは、どのような場面か、話し合ってみよう。

【答】　グループ活動などで、日常的な選択や意思決定の具体的な経験を出し合う。自分の経験でなくても、歴史的な状況を想像するなどでもよい。例えば学校などの集団生活の場では、全員の利益のために、各自の行動があらかじめ決められた選択肢から選ぶことしかできないことがある。買い物や社会的なサービスについても、提供者の都合に沿って選択するしかない。進学などについても、社会的な動向やイメージ、保護者の意向によって選択の範囲があらかじめ決められているように感じることもあるだろう。そうした経験はだれしも持っている。また、歴史的な状況としては、国民の義務や、国家的な制度の変更などが考えられる。

個人の選択と、大きな社会のシステムとの関係を意識し、個人にとってそうしたあり方が、楽なのか、不自由なのか、仕方がないのか、自分にとって居心地よくする方法はないのか、などについて話し合ってみる。

（尾崎名津子）